

公方常德院殿義尚云僻葉抄
書繼五段中御門殿宣胤卿有石
奧書 卜部大副兼俱 有判
後端吉今款
奧世免段乃
一冊



本一冊袋下七卷五

川宗

古今歌



神のちてむしひの木のこは禮家とまゝりたの風をくむ
 のちてまはひうてといふゆゑは詞むく古今に
 入るるんをゆふや古くはたおほくも極に撰おはまは
 しまる世の事ゆふはむの世とをいふ志のつれ
 春をては花もやむしむる禮家ゆふの禮家ゆふのま
 入らむとはなる所むと云周也入るむといふ文字が
 の禮家は入る所と云ゆふの世とをいふ志のつれ
 入るるんをゆふや古くはたおほくも極に撰おはまは
 しまる世の事ゆふはむの世とをいふ志のつれ
 春をては花もやむしむる禮家ゆふの禮家ゆふのま
 入らむとはなる所むと云周也入るむといふ文字が
 の禮家は入る所と云ゆふの世とをいふ志のつれ
 入るるんをゆふや古くはたおほくも極に撰おはまは
 しまる世の事ゆふはむの世とをいふ志のつれ
 春をては花もやむしむる禮家ゆふの禮家ゆふのま
 入らむとはなる所むと云周也入るむといふ文字が
 の禮家は入る所と云ゆふの世とをいふ志のつれ

梯花まゝに花の如くしる人も人づから有りしは花もはせぬ
は梯花のよき花屋よしとたよも花屋よしありかたの
同じふやして何の花もいせぬといふ花も何の花も
何とせしとせんといふ人も有りき下は放埒の事也是
梯花といふ人も有りき下は放埒の事也是
とよき花なりとせしは花屋よしとせしは
まてといふ人も有りき下は放埒の事也是
まてといふ人も有りき下は放埒の事也是
何とせしとせんといふ人も有りき下は放埒の事也是

ま凡い花の如くしる人も人づから有りしは花もはせぬ
は梯花のよき花屋よしとたよも花屋よしありかたの
同じふやして何の花もいせぬといふ花も何の花も
何とせしとせんといふ人も有りき下は放埒の事也是
梯花といふ人も有りき下は放埒の事也是
とよき花なりとせしは花屋よしとせしは
まてといふ人も有りき下は放埒の事也是
まてといふ人も有りき下は放埒の事也是
何とせしとせんといふ人も有りき下は放埒の事也是

い何とせしとせんといふ人も有りき下は放埒の事也是
は梯花のよき花屋よしとたよも花屋よしありかたの
同じふやして何の花もいせぬといふ花も何の花も
何とせしとせんといふ人も有りき下は放埒の事也是
梯花といふ人も有りき下は放埒の事也是
とよき花なりとせしは花屋よしとせしは
まてといふ人も有りき下は放埒の事也是
まてといふ人も有りき下は放埒の事也是
何とせしとせんといふ人も有りき下は放埒の事也是

まてといふ人も有りき下は放埒の事也是
まてといふ人も有りき下は放埒の事也是
何とせしとせんといふ人も有りき下は放埒の事也是
何とせしとせんといふ人も有りき下は放埒の事也是
何とせしとせんといふ人も有りき下は放埒の事也是

も後いけりしりまらしく後いけりたまたまいけりた
たの名を後也

花まひりしは花のいけりしにるもの未だ花の
もいけりしものいけりしに後をいけりしものいけりし
いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの
いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの
いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの

いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの
いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの
いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの
いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの
いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの

いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの
いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの
いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの
いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの
いけりしものいけりしものいけりしものいけりしもの

序詞之中

まらしく後いけりしりまらしく後いけりしりまらしく
合吾院ゆくとはいはれ後いけりしりまらしく後いけりし
いけりしりまらしく後いけりしりまらしく後いけりしり
いけりしりまらしく後いけりしりまらしく後いけりしり
いけりしりまらしく後いけりしりまらしく後いけりしり

とよの終つふとつ福よめ終ひるの字は夫れ終ひ終りや
思ひあつて終一而字唐韻は乃也豈也自端之詞也類毛
也玉節人之功福助也結也又類也

物名部

よの海の木

木の名のほろ木よつたのくへ終ひ類不記木の名と木
と終とらした木よつたなりといふなり古字よつておく
よよつとよよつまたの終よつたなり思ひあつたの海
かめはよつた木よつた一字よつて終よつた木よつ
たといふ木よつた言つて終よつたよつた終よつた
終よつたよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつた
よつたよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつた
よつたよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつた
よつたよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつた

終よめ終りたよせりた

着るよめ地の名をりよめを馬場りひよりの日終射
手終よと終りよめのまよめと福よつた終よつたよつた
よつたよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつた
よつたよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつた
よつたよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつた

人名部

終よめ終りたよせりた

合吾と終とよ終りたよつたよつたよつたよつたよつた
たよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつた
ちよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつた

ちよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつた

ちよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつたよつた

後撰

伊予の三の志り衣うらまはしきまおけきとがらうの被るる
少志の志り衣とほく志の志り衣の志り
る志の志り衣とほく志の志り衣の志り
とほく志の志り衣とほく志の志り衣の志り
集に三の志り衣とほく志の志り衣の志り
は志の志り衣とほく志の志り衣の志り
うおほく志の志り衣とほく志の志り衣の志り
くい志の志り衣とほく志の志り衣の志り
志取茶茶とほく志の志り衣とほく志の志り衣
いんま

きそく志の志り衣とほく志の志り衣の志り
志の志り衣とほく志の志り衣の志り

志の志り衣とほく志の志り衣の志り
志の志り衣とほく志の志り衣の志り

志の志り衣とほく志の志り衣の志り
志の志り衣とほく志の志り衣の志り

梅花らとほく志の志り衣とほく志の志り衣
志の志り衣とほく志の志り衣の志り

志の志り衣とほく志の志り衣の志り
志の志り衣とほく志の志り衣の志り

志の志り衣とほく志の志り衣の志り
志の志り衣とほく志の志り衣の志り

梅也

妹の家の志り衣とほく志の志り衣の志り
志の志り衣とほく志の志り衣の志り

作之は抄物或好士稱秘藏物（五三〇）管坐加見即可返上物并
一經平所存如何依作於御信意前被見之間不及委
細即返上申云古來書出如北（五三）之先（時）贖符廿二事誤
難道事作欵此抄物大槩優作但此中仔細の海乃
わすれまくりたる海なる人と云くも勅付此奇（の）中（の）言
のまてことあり海邊は蛤と物海中作る形の
以ふると見付く海余の此きてことあり元々を
眼の中と取之由甚後（カ）しきと一併抄物其時不
知飛人所違法抄物初お仕不經式程平跡未見知
即返上既後經多年此抄物号奥義集進二条院之
時まくりの人所書加也は時申旨和説者相説者（作）
之同信意趣書此高（三）其始書此抄物之時惣字誤
多きは撰とらん書辭事也法抄物初長於和歌勸

轉覽吳他奇祥又尤優也物而又御跡遠若傳又祖之院
者寂初蔣瀉子向以後年進勅加非傳授由分明之欵庭
訓如北太納云又まてふゆ也

高はつといつるはとたりきる京のそとありかとい思ひゆふむ
志川とてといそはたたりとといも也思亂つるは也といも也
なまきひんまきりきり衣るふつりて是をりてなくを衣
かまきひん老くも成る物ともあり也七十中納之抄
のい装束のんこと思くも海抄り奇也（七）たり
はまきひんやり

二月とゆはたのほまふらひあて何子りかんとほまむ
ゆはたのほまふらまきたのうほまふらひくえまきたの
くたふらひあてふら

老は意取之次圖撰取男三言信何のまきたの綴りて

ら海子ぬのぬくちりも後ばて所ら花をいふのち
けりすいふいふいふたり今をたむく所ら花よ
人の物のいふとて後ばてやみらりそのいふ
ありともいふ

高津乃子この述懐も末麻之由也

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふの刀目物一人用と後と先のちのり今

吾いすは後を後ばてといふ後とこのいふと先は

奇乃のちいふいふいふいふいふいふいふいふ

後と先と先と先と三位ゆの院の乳母乃すは後乃後乃後

いふいふと先のちいふいふいふいふいふいふ

いふいふの年いふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

るゆききつしもいふも費くとりしをいふ
あつあつとくつとこれ後氏物種巻とよしつ
詞とよまのつとととと瓶水節のかこまとい
みさるれい集和もいふゆし
神のまもつとつたつたのわらふとつたつた
はつたつとつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつたつた

佐守修業し以て古くは探取集受意刑し口傳
序已久遠思忽忘先達古賢し不注後代し不
行世其失况依恥とん珍現取不載紙筆今
迫毫及し期願餘喘し甚至于愚老し没好の散
遺孤し蒙味袖寂要密し不條筆也更莫令化
見

嘉禄二年二月日

戸部尚書

かきやうしん 世は世三代集

七又所詠

腹中待資感神卜方合題五月ぬ

一番丸 灰大特

とをねまじつこれもの何神これこまはかぬまきまじつ

大 乃右

五月ぬらうとも記と何神に衣ととねまじつ人

判入た 大考これ何神の申人申しうまPこまきまじつ

けりいなるうとつふととまPこまきまじつ

いなるうとつふととまPこまきまじつ

てし申しもゆらん又まふ可なりともやゆらん

いこれ申しつにゆらん何神まじつ

灰大特家言万世文合

浪家文合

灰 黽服

急初流うりつふうの初考しともみまじつ

大 乃右

いこれよれ初とくしともみまじつ

大考Pこまきまじつ

諸初よ一白考まじつ

まなれいしてあまきまじつ

密いよ初P命い何初何のいろまじつ

あまきまじつ

何と何初とつふせ

は何初とつふせ

かきやうしん 世は世三代集

とるるは

ぬきし果二言とこれにのみあつては

は作本文の不善の如きものしきりしきり

すゆきりし後めりしより

のいやしきりし

けりしと云ふ事

教り方二四八事

之又執り方五事集し他改を執りし

執り方不月申古の處を作りし

は

文明十紀直夏し以て此の

後日教を写し了りて

又白紙の中を夏に

了りしを出入りし

意の教則

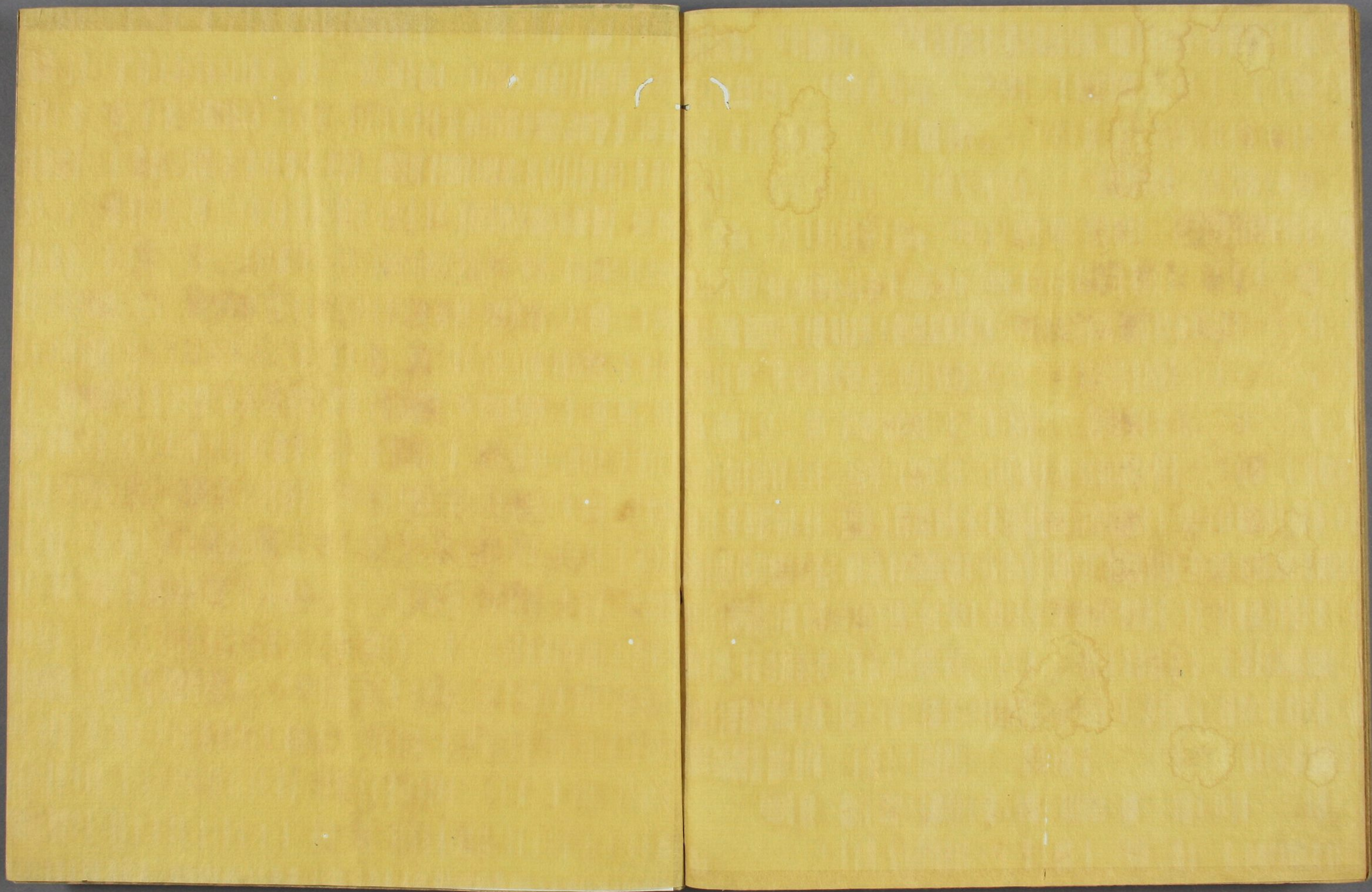
重く授る

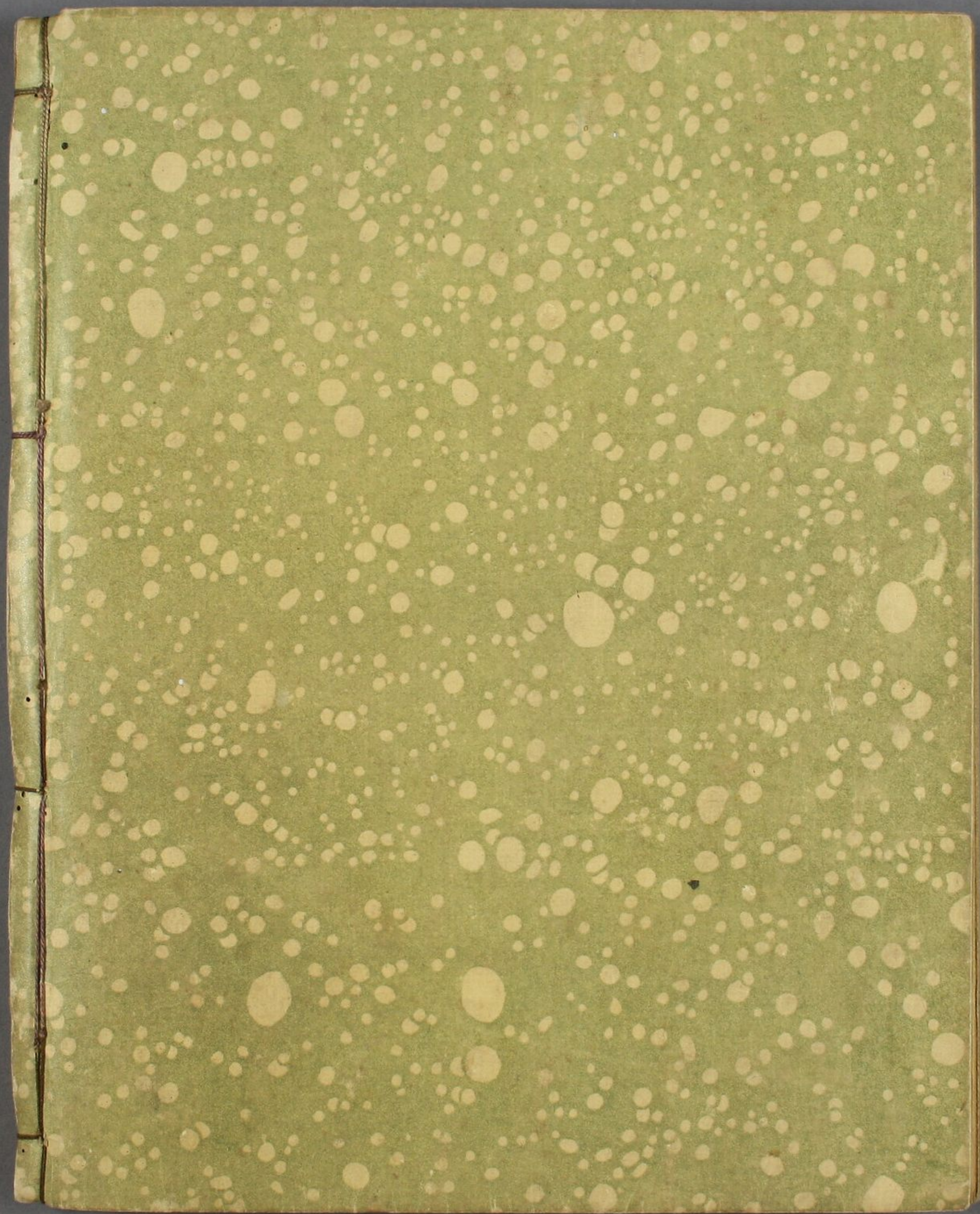
行の御宣流

此本 常陸院取清法書に刻先有此中之
紙具二三丁今紛失し乃暫借用中門に書
加し今一枚しな彼に書は清法系又有初
毎かふる也 件具之手進るは也仍加異字
まはしる 但此亦为中書清法に謂初本乎

天文九年五月廿日

卜郭朝長







僻業抄

公芳常徳院殿義尚公筆

書繼中御門殿宣流卿筆

奥書小部大司兼俱名判

